

文化の継承

その十二年目の瀬行事 お年夜

まもなく年の瀬を迎え、どこの家庭でも、この季節ならではの行事をなさるでしょうが、とくに鶴岡では、例えば十二月九日は、大黒様のお年夜で、家族一緒に豆料理を食べながら家族の幸福を願い、一夜を温かく過ごします。また十二月十七日には七日町観音堂のだるま市に出かけるなどです。このように、鶴岡には、その家々で受け継がれ、季節の行事として大切にしてきた数多くの年中行事が、一年を通して行なわれています。

そこで今回は、庄内民俗学会員の五十嵐文蔵さん、梅木壽雄さん、七日町町内会会長の小杉誠さん、農家民宿オーナーの長南光さんにお集まりいただき、同学会会員の後藤義治さんの司会で、年の瀬行事「お年夜をテーマに、家庭や地域で行なわれる年中行事について語つていただきました。

人と共に 神様も年を越す



五十嵐 年夜というと、例えば

大黒様ですと九日、お観音様で
したら十七日。これはおそらく

後藤 昔の人は生きるため、生
活するためにいろんな行事をや
つておられたわけで、人々は、

代々それを地域や家ごとに受け
継ぎ、今まで大切な年中行事
として行なわれています。そこ
で今回は、その中の一つ、年の
瀬の行事をテーマにお話を伺い
ます。まず、五十嵐さんから

後藤 梅木さんはどうですか？

梅木 今、五十嵐さんがおっし
「年夜」についてお願いします。



七日町観音堂のだるま市

やつたとおりだと思います。私なりに調べたことですが、昔から、神様や仏様には、それぞれご縁日ということがあります。例を申し上げますと、毎月の五日は恵比寿様、八日は薬師様

九日は今お話がありました大黒様、十二日は山の神様、十七日（十八日とする所もある）が觀音様、それから「十四日が地蔵様で、各月にお祭りをします。そのうち十二月は歳末、年越しなわけで、神様のお祭りも年を越すお祭り、つまり「お年夜」。そこで「お駄走」を上げて神様をもてなし、「今年も無事に暮すことができた」と神様に感謝するんです。

後藤 羽黒の松例祭も、大晦日の夜にやつて一月一日の朝に解散します。一年のいろいろな汚れを払つて、新しい気持ちで新年を迎える。そういう意味もあるのでしよう。

梅木 そしてもう一つ。お年夜は「夜」とつきますよ。それはなぜかと云つと、本来、このお祭りは日の高い日中ではなく、夕方からお祭りを始めて、終わるのが朝。「夜籠り」という少し古い形式をとる行事があるんですが、氏子の人や一般の人たちが夜を通してお堂にこもつて、神様を拝み、神様に仕える。そ

後藤 や家でお祭りの仕方は違うかと思いますがの。我が家では、大黒様のお年夜には、黒豆の入った色のついた豆（ごはん等、豆づくしの「お駄走」を食べます。お菓子も、「豆いり」（米いり）といふ、米を煎つたものに黒豆をまぜ、砂糖をまぶして食べるんです。だから大黒様のお年夜を昔の子供は楽しみにしてました。

梅木 大黒様は、昔から福の神として恵比寿様と対に祀られ親しまれてきました。私なりに調べたところ、もともとは大黒様の起源は、古代インドの大黒信仰で、今の姿とはまったく違う形相をした恐ろしい戦闘の神とされていたんです。それで時代が下つて、寺の厨房の柱に、この神を守護神として祀ると、多くの僧が訪れよつとも食事に困ることはないとされるようになつたという。形相もだんだん

ういのは一つのなりだと思います。人と共に神様も年を越されるということです。

十一月九日 大黒様のお年夜



小杉 誠 氏
七日町町内会会長



五十嵐文藏 氏
庄内民俗学会会員
市郷土資料館運営委員長



梅木壽雄 氏
庄内民俗学会会員
田川民話の会顧問

長南 光 氏
農家民宿オーナー、地元
なりではの料理に精通



後藤義治 氏(司会)
庄内民俗学会会員
市郷土資料館運営委員長

とおだやかになつていつたでしょ。それから唐の時代に中国に伝來し、日本には、天台宗の開祖、最澄によって初めてもたらされたと言われ、それから各寺院に広まつていつた。とくにこの大黒様は、時代が下るとますます福の神の色合いが濃くなり、室町時代には、今のような左手に大きな布袋を背負い、右手に小槌おづを持ち、米俵に座るという大黒様が作られたと言われます。また、当然、日本に伝來してからですが、神話に登場する大国主命と大黒様が重ね合つて民間に広まり、庶民の信仰はさらに広まつたといわれています。

「私なりに子供のころから食べてきた、体で覚えてきた味を復元して続けています。母から『この料理はこうして…』と言われたわけではないけれども、季節の行事食っていうのは、子供のころから日々の暮らしの中で伝えられてきたと思います。

五十嵐 大黒様の年夜と豆は深い関係がありますの。「まめで丈夫に働くよう」なんてよく言われます。

梅木 私も昔、家のお年寄りから、大黒様は大変働くことが好きな神様だから、我々も大黒様にあやかって、まめで働くために食べるんだと言わされました。それで豆料理、豆づくしなつたのでしょ。

また、大黒様のお年夜で欠かせないのは、「一股大根（三股大根）」をお供えすることです。「まつた大根」と言います。これには、昔話がありまして、大黒様はとても餅の好きな神様だった。あまり餅を食べ過ぎまして、お腹をこわして苦しんである村の中を歩いておったたら、堰ばたで若いお嫁さんが大根洗いをしておりました。大根を食べると腹痛が治るということです。

「これはありがたい」と大黒様の嫁さんに、「大根一本分けました」と頼みました。

すると嫁さんは「家の姑さんが厳しい方で、大根一本一本数えて洗つてるんだから分けられない、困ったなあ」と。するとその中に「股大根」があった。これを一本として数えればいいから嫁さんは「股大根の片方を折つて、大黒様に差し上げたんです。大黒様は大変喜ばれて召し上がり、そして腹痛も治つて喜んで帰つたということです。それからその嫁さんも大変幸せになつたそうな。こんな昔話があつて二股大根を大黒様の年夜に供するようになつたと言われています。二股大根を「大黒様のお嫁様」と呼ぶ地域もあるんですね。小杉 我が家では、財布も供えてます。



大黒様のお年夜のお供え (田川地区)



お年夜料理（豆づくしの料理の中にはその家ならではの味や思いが込められている）

まめで丈夫に
働くように



後藤 長南さんの家でも、この日なりではの料理を作つておひざれると思いますが。

いう大黒様が作られたと言われます。また当然、日本に伝来してからですが、神話に登場するおほくじゆうさま(おほくじゆうさま) 大国主命と大黒様が重ね合つて民間に広まり、庶民の信仰はさらに広まつたといわれています

開祖、最澄によつて初めてた
らされたと言われ、それから各
寺院に広まつていつた。とくに
この大黒様は、時代が下るとま
すます福の神の色合いが濃くな
り、室町時代には、今のように
左手に大きな布袋を背負い、右手

の料理は「いひしー…」と言われたわけではないけれども、季節の行事食っていうのは、子供のころから日々の暮らしの中で伝えてきたと思います。

五十嵐 大黒様の年夜と豆は深い関係がありますの。「まめで

梅木 私も昔、家のお年寄りから、大黒様は大変働くことが好きな神様だから、我々も大黒様にあやかって、まめで働くために食べるんだと言わされました。それで豆料理、豆づくしなつたのでしょうか。

たそうな。こんな昔話があつて
「股大根を大黒様の年夜に供する」
ようになつたと言われています。
す。二股大根を「大黒様のお嫁様」と呼ぶ地域もあるんです。
小杉 我が家では、財布も供えてます。
後藤 財布には、お金が増える
ようにお金を入れてやりますの
やつぱり大黒様は福の神といつて
いとでしょつる。

家族の幸福 願いながら



長南 地域や「家」とに少しすつ
違つと 思いますが、我が家でも
つづけます。

魚を食べると聞いています。豆腐も少し固めにして焼いて田楽にして食べます。田楽も味噌だから、もともと大豆ですよね。

には、昔話がありまして、大黒様はとても餅の好きな神様だった。あまり餅を食べ過ぎまして、お腹をこわして苦しんである村の中を歩いておつたら、堰(せき)ばたで若いお嫁さんが大根洗いをしておりました。大根を食べると腹痛が治るということでした。「これはありがたい」と大黒様その嫁さんに、「大根一本分けてもらえないか」と頼みました。

たそうな。こんな昔話があつて
「股大根を大黒様の年夜に供する」
ようになつたと言われています。
す。二股大根を「大黒様のお嫁様」と呼ぶ地域もあるんです。
小杉 我が家では、財布も供えてます。
後藤 財布には、お金が増える
ようにお金を入れてやりますの
やつぱり大黒様は福の神といつて
いとでしょつる。

すると嫁さんは「家の姑さんが厳しい方で、大根一本一本数えて洗つてゐるんだから分けられないと困ったな」と。するとその中に二股大根があつた。これを一本として数えればいいから嫁さんは二股大根の片方を折つて、大黒様に差し上げたんです。大黒様は大変喜ばれて召し上がるが、そして腹痛も治つて喜んで

いくもので、日常の当たり前の
ことだからか記録したものがな
かなかありませんが、図書館一
階の郷土資料館にこんな資料が
ありましたので紹介します。

文化十年（一八一三）ころ、鶴岡の百三十石の武士の家の年中行事についてその家人が記録したものです。それによりますと、やっぱり十二月九日は大黒様の年夜をしています。一部読んでみると、『大黒天お年越し 家々これを祭る…』と。その品々いざれも知るところゆえ略す…』と。そう述べながら、『甚だしきは豆腐をもつて四十八色神前に上げる…』とある。『豆腐をもつて四十八色』といふのは、たくさん作ったといふ意味でしょう。その他に、この五十年くらい後の、四百石の武士の家の年中行事の記録があり、それにも豆腐や黒豆、米でお膳を三つ作り、大黒様のお年夜をしたとある。というわけで、このお年夜を、一百年くらい前にはすでにやっていたようです。それを今我々が引き継いでいるんです。

それから、これは昭和十年ころのある家の記録で、大黒様の年夜の夜にやつた「硫黄つけ」について記録されました。硫

黄つけというのは、昔、マッチのないころ火種にするために作ったものです。缶詰の缶に硫黄を溶いて、それを麻の、纖維をとつた後のオガラに付ける作業です。これを一年分大黒様の年

夜の夜に作つたそうです。何でそんなことをやつたかというと、中行事で達者で働くようにと言わば収入が上がる、収入が上がるということは、みんなが幸せに暮らせる、福が舞い込む、大黒様は福の神。そう考えて、その日に硫黄つけなど何か仕事をする福が舞い込む、財産持ちになると考えたのでしよう。

後藤 同じ大黒様の年夜でも、私の生まれた村山、内陸地方では唱えごとをします。そして、大黒様の年夜とはあまり言わず、「大黒様の耳あけ」と言います。私も子供のころしましたが、升に煎つた豆を入れてふたをしてガラガラと音をさせて振るんです。そして「大黒様、大黒様、いい耳を聞かせてくれ」などと唱えます。どうして豆をいれて鳴らすか、これは大黒様は耳がよく聞こえないから神社を参拝する時にならす鈴のよつて、神様を呼ぶのでしよう。

梅木 『温海町の民俗』という本を読みますと、それと多分同じようなことが温海の越沢に残つていて、やはり豆を升に入れてガラガラと振つて、それを大黒様に自分たち家族が一生懸命働く様子を見せたいという意味があります。働けますと、大黒様に自分たち家

族が一生懸命働く様子を見たいという意味があります。働けば収入が上がる、収入が上がるということは、みんなが幸せに暮らせる、福が舞い込む、大黒様は福の神。そう考えて、その日に硫黄つけなど何か仕事をする福が舞い込む、財産持ちになると考えたのでしよう。

五十嵐 やはり家庭行事ついての話は、その家々で伝えられてるんだ。地域ごと皆同じとも言えないし。ただ、今まで暮すようにという願いはどの行事でも共通で、誰もがこの温かい思いを湧かされた。とても貴重なことで、こういう家庭行事は続けたいですね。

後藤 次にこちらも「お観音はんのお年夜」と呼ばれ親しまれてきた七日町の観音様のお年夜と、だるま市について梅木さん伺いたいと思います。

梅木 七日町観音堂の由来から申しますと、江戸時代、あそこは柳福寺といつお寺さんがあつて、そこで観音様を祀つていました。ところが、この柳福寺が文化年間に火災にあって焼失してしまつたと。その後やつと、江戸末期に近い嘉永三年（一八五〇）に寺を再建したんです。



座談会の様子



郷土資料館所蔵の文久3年と昭和10年の年中行事の記録

しかし明治二十一年、今度は七日町町内の火事のもらい火でまた全焼してしまったんです。その後、明治二十六年に仮のお堂を建てたけれど、寺そのものの復興は難しく、様々な縁縁があったようですが、現在は七日町内会で南岳寺の住職の下、護持管理、祭祀を行っております。それから本尊様。私も一度拝ませてもらつたことがあります。

六七ほどの木に刻んだ小さいお姿の觀音様で、大日様の膝の上に小さく立てかけられておつたんです。言い伝えによりますと、慶長十一年（一六〇六）酒井家の前の領主、最上義光の時代のちょうど、十一年に、七日町觀音堂の裏の内川を普請した時、偶然川に觀音様が沈んでおつたのを見つけて、それを上げてお祀りしたという由来を伺つております。それから十一年に一回、午年に「開帳」しております。確か、八月ころでしようか。

小杉 そうです。

梅木 日本には、方々で神様が川や海から上がったという信仰がございます。例えば、鼠ヶ関の弁天様も、海から上がられて、そしてお祀りしたということが伝えられています。

後藤 だるま市の起こりはいつからなんでしょう。

古きを大切に 今も伝えていく



後藤 十一月の暮れになると、

店の皆さん、「歳の市」会場を設け、餅つき大会やくじ引き等をし、「市」を盛り上げています。

中でも大勢の方が参拝に訪れます。最近は、小学校や幼稚園からも参拝に来ています。この日は町内会でも、だるま祭り協賛店の皆さん、「歳の市」会場を設け、餅つき大会やくじ引き等をし、「市」を盛り上げています。

梅木 ここは切山椒は麺のよう

に細長いでしょ。無病息災で長生きするようにという庶民の願いが込められているとも聞いたことがあります。

小杉 毎年、十一月十七日は天気が荒れることが多く、吹雪の中でも大勢の方が参拝に訪れます。最近は、小学校や幼稚園からも参拝に来ています。この日

遠くに住んでいる親せきに鶴岡藩政時代、七日町には遊郭がありませんと言われています。その遊女が苦難から逃れたいと、七軒び八起きを願つてだるまを買いました。それが一般に広がつて、今では縁起物としてだるまや熊手が売られています。

後藤 「切山椒」もだるま市の名物ですよ。

梅木 今は核家族の家庭が増えていますが、例えば大黒様のお年夜の日は、若い人たちが実家のおじいさんやおばあさんのいるところに帰つて来て一緒にお祭りをしたらどうかと。そういう中で、お祭りのいわれや料理のお話を聞きながら子供たちに自然に身についていく。

正月料理も、昔は家でみんな作つていていたわけですが、近年は便利主義といつも、正月料理もお供えもお店に行けば、もうセットで売つている時代です。確かに便利主義は楽になつていいけれど、考えるべきことがいろいろあるのではないかと思いま

長南 我が家も息子夫婦とは別に暮らしてますが、お盆や正月などの行事には一緒に過ごしてます。あとは自由なんだけれども。お盆のお墓参りも一緒に、おはぎ食べるのも一緒に、雑煮も一緒に。今、こういう行事をする家が少なくなつてきていると



郷土料理の下準備。食材や行事について話しながら手際よく進められる。



七日町觀音堂

言われるけど、若い人たちのは、いつ、どんな行事やならわしがあるのか、やる気がないのでではなく分からぬのだと思うんです。やっぱりこれは、周りの人が積極的に暮らしの中で伝えしていくことだとと思う。古いことを本当に大事にして、新しいことも取り入れながら、若い人に暮らしの中で教えて、実践して伝えていきたいと思うの。

五十嵐 なるほど。給食で出すところのも一つの方法です。長南 昔の料理や行事食というものは、手間暇がかかるんだけど、でも、これを子供たちに日常食べさせての、暮らしの中での行事の意味も一緒に伝えていかなければいけない味ですよ。



ますから。長南 貧しい家庭が多かつた昔と今は違うかも知れないけど、大黒様のお年夜に幸福を願う気持ちや風習は、心のもち様として大切にしたいです。

梅木 若い人も、無関心なのでではなくて、分からぬいという人が多いのでしょう。

長南 子供たちは、昔も今もやっぱり変わらないんですね。

梅木 それが大事だと思う。ミニューケーションをとらないといけない限り伝わらないからの。
五十嵐 家庭の行事は家庭でやらない限り伝わらないからの。
長南 季節ごと、正月にはお雑煮を食べ、歳開きには歳に行つてお酒を飲んで、女の子の節句には甘酒だつたり、男の子の節句には笹巻きを食べたり。お盆は、亡くなつた人が来るんだよつて。早く来るよう馬に乗つて、歸りは二度きりつて、

長南 我々が子供のころは、地域のお祭りや家の行事のある日に、お小遣いをもらつて買い物ができた。手にぎっしりの小銭をしつかりと握つて行って、子供心にわくわくした特別な日だったの。そういう思い出が、大人になって、故郷を想う気持ちにつながっていく。だから、こういった行事はなくはないでこれからも続けていきたいと思

家ではお祭りには、孫に必ず浴衣を着せてやるんです。普段とは違つて、お祭りになると浴衣を着て下駄を履けると子供もうれしそうで。そうやって季節ごとに楽しめながら、日々の暮らしの中で、子供たちの心に、それぞれの行事を伝えていきた

帰りは牛に乗ってゆくり
帰るんだよといつお話しもしたり
そんなことを次に伝えるのは、
やつぱり我々年を重ねた人たち

五十嵐 昔は、盆と正月しか小遣いをもらえなかつた子供が多かつたからうれしかつたよ。

後藤 大黒様のお年夜のよくな
家でやる行事も、地域で受け継
いでいる伝統も、今実際にやつ

の義務なのかなと思うんです。
後藤 暮らしの中で、これだけ
は残していきたい、伝えたいと
いうものはあることによる。

じつこの年中行事つて、やつぱり子供の心に深い印象を残しますよ。

ている人が一生懸命やつていれば子供もそれを真似るし、そういう意志を伝えるのは大人の責まね任じんなのかもしれない。その季節

私のなりの考えですが、学校給食の中では今日は大黒様のお年夜だから豆の料理ですよと郷土料理的なものを入れたり。

時に食べた切山椒の匂いや、どこかぴりっとした味は、その行事の時の味だと思って、時間がたって大人になつても心に残り

仕事の仕事ではない、その他の仕事
ごとの行事を大切に続けていき
たいです。本日はありがとうございました。
一同 ありがとうございました。

楽しい思い出は
故郷を想う心に



七日町觀音堂のだるま市